



# 信友会会報

2011年11月

## <<9月例会より>>

信友会9月例会には、名誉牧師の大宮チエ子先生により、「共に生きるために」と題する講演をいただきました。今年度の信友会例会においては、3月11日の東日本大震災を体験して、聖書をどう読み、如何に生きるかを学んできましたが、今回は、「ヨハネの手紙一」の聖句を通して新しい生き方を話していただきました。

## 信友会9月例会

「共に生きるために」

大宮チエ子先生

信友会の例会でお話しをする機会を与えられて感謝しています。どういうテーマで話そうかと迷いましたが、やはり3月11日の思いがけない大震災以来、人々が助け合い、支えあって行くことの大切さを身に沁みて教えられましたので、「共に生きるために」というテーマにしました。しかし、「共に生きる」ということは、特

別な事態の時ばかりではありませんし、私たちは一人では生きてゆけません。子供ばかりでなく大人になっても、身近な人だけではなく、多くの人々に支えられ、助けられて生きています。多くの人々の努力、祈りと恵みに支えられて、自分があることを実感していると思います。



最近は幼児の虐待が増えています。育児放棄が多いのです。世話をしてくれるはずの親から虐待されるのです。わたしの関わっている施設にも、小学生なのに立って歩けない子供がおりました。裕福になったはずのこの時代に、信頼する親から育児放棄されている状況に深い悲しみを覚えています。

使徒パウロは、「コリントの信徒への手紙一」15章9節～10節で、「わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でも一番小さなものであり、使徒と呼ばれる値打ちのないものです。神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他の全ての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」と言っています。このことは、パウロのみならず私たち一人一人も同様です。神の恵みは、私たちに与えられ

た贈り物であり祝福です。あのように偉大な働きをしたパウロでさえ、罪人の頭であると告白し、わたしが今日あるのは神からの一方的な恵みであり、「値しない者に与えられた神の祝福であり恵みである」ことを強く感じていたのです。

使徒言行録9章1節~3節では、当時のサウロは、主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで出かけ、男女を問わず縛り上げてエルサレムに連行していました。しかし、ダマスコ途上で神に捉えられて回心し、この人こそ神の子であると告白して、神の伝道者になりました。その後のパウロは、地中海世界の各地に伝道を展開し、沢山の教会を建て、多くの信徒を育てました。パウロは聖書に沢山の手紙を残しております。私たちは福音書によって信仰に導かれると共に、パウロの手紙によってキリストを深く、正しく知ることができます。私は、パウロの手紙を通して心を動かされて信仰を受け入れることができた告白する沢山の人々を知っています。

私は父の勤務の関係で転校することが多かったのですが、小学4年の2学期に小倉に移り、その後県立の小倉高等女学校に入学しました。徒歩で通学できましたが、途中の線路を挟んで反対側の山の上に西南女学院というミッション・スクールがありました。しかし、町の様子もよく知らなかったこともあり、キリスト教についての知識も興味もありませんでした。教会に通うようになるとは想像出来ませんでした。教会へ初めて行ったのは、親しい同級生の姉上で学校の先輩でもある方が逝去され、その方が会員であられた教会で行われた葬儀に出席した時でした。

翌年学制改革があり、共学の高等学校2年に編入しました。私は、初代生徒会長に選ばれ、生徒の要望と学校側との交渉や調整に忙しくしておりました。そういう中、高校2年に編入してきた女生徒がカトリックの求道者で、学校内で伝道を始めました。信教の自由があるとはいえ、学校内でのキリスト教への勧誘は好ましくないもので、その生徒と話し合いましたが埒がきません。そこで、キリスト教とは如何なるものかを知るために、数名で教会に聞きに行くことにし、市の中心にあるプロテスタントの小倉鍛冶町教会を訪ねました。牧師からは、話だけでは理解が出来ないので礼拝に出るように薦められました。教会へ出席してみると、尊敬する生物の先生の父上が長老をされており、とても喜んで歓迎して下さいました。この方は、礼拝が始まる前に上履きのスリッパを揃えるなど、会員への細かい配慮をされておりました。私には、よく声をかけて下さるので、抜けられなくなり、教会に出席するようになりました。そして、高校3年のイースターに洗礼を受けました。



私は、小学校の時から、理科や数学に興味があり、将来も理数系の道を目指しておりました。当時の数学の先生から、理数系に進む者たちが進学できるよう課外授業などで熱心に指導していただきました。しかし、その先生が突然事故で亡くなられ、私は大きいショックを受けました。そして推薦を約束されていた大学を辞退しました。自分の進路は、自分の興味や生活の安定を望む、自分のためだけではない生き方を考え始めたのです。

自分が進むべき道として人に仕える方向を模索して、教会へ熱心に出席するようになりました。高校卒業時には進路が定まらず、旭硝子株式会社に就職しました。そして、2年後に東京神学大学に進むことになりました。

た。神さまは、私たちに思いがけない曲がり道や想定外の方向を示されることがあります。私は、神さまに導かれて歩む限り、一切無駄はなく、すべてを益としてくださると信じて進んできたことに深く感謝しております。

「ヨハネの手紙一」の3章11節から18節は、小見出しが「互いに愛し合いなさい」になっており、互いに愛し合うことの大切さを教えています。愛は、心に向けることから始まります。私たちは何に心に向けるかによって生き方が変わってきます。また、その人がどのように生きているかが見えてきます。聖書は、互いに愛し合いなさいと薦めています。

「ヨハネによる福音書」3章16節には、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」と書かれています。ある人は、「もし聖書全体が失われたとしても、この言葉によって、独り子を下さるほどの神さまの愛の教えは残る」と言いました。私たちの命は神さまにいただいたものですから、与えられた命を全うするために、互いに愛し合い、慈しみあい、尊びあって共に成長して行きたいものです。

3月11日の大震災後、互いに助け合って生きることの大切さを強く深く確認し合いました。私たちは、キリストが教えてくださった愛に導かれつつ生活して行きたいものです。

皆さんご存知のように、八木重吉の詩に「神さま、あなたに逢いたくなかった」という「祈りのみち」の詩があります。八木重吉は29歳で亡くなったクリスチャンの詩人です。

「信ずること、キリストの名を呼ぶこと、人をゆるし出来る限り愛すること  
それをわたしの一番よい仕事としたい  
ゆきなれた路の  
なつかしくて耐えられぬように  
わたしの祈りのみちをつくりたい」

私たちも、八木重吉と同じ思いをもって歩んで行きたいものです。

また、最近本の整理をしていた時に、2008年11月号の「心の友」に掲載された三浦光世さんの文章、「作家堀田綾子との40年とその後」を見つけました。三浦光世さんは三浦綾子さんの夫君です。そこには、光世さんのプロフィール、脊椎カリエスで入院していた綾子さんとの出会いと結婚。その後のお二人の執筆活動が書かれていました。お二人で始められた「氷点」など作家としての活動は思いもよらない展開を辿り、本人達も驚いたと書いていました。お二人の生涯については、自伝「道ありき」に詳しく綴られています。

三浦さん夫妻には、綾子さんの記念文学館ができた頃に旭川に行き、文学館を見学した後、お二人がいつも散歩しておられた川沿いの道を散策し、ご自宅を訪ねました。当時、綾子さんはすでに病が重くなって、言葉も少なくなっていました。家の2階にある書斎に案内してくださったのですが、変形の4畳半くらいの部屋に、小さな本箱と机があるだけでした。綾子さんはこの狭い部屋を歩きまわって考えながら文章を綴られ、光世さんは机の前に正座をして綾子さんの言葉を書き留めていかれたそうです。畳がすり切れていましたが、祈りに祈って一言一言書いたと言っておられました。この小さな部屋で、あのように多くの名作が生み出され、私たちに新しい世界を与えてくださったことを思い感動を覚えました。

ご夫妻が綴られた優れた書物によって、多くの人々に感銘を受け、信仰に導かれたことを思い、お二人に働いてくださった神さまの不思議と御業に深く感謝するものです。

私たちは、3月の大震災以来、互いに思いやり、助け、支えあう事の大切さを強く、深く教えられました。主イエスは、その生命をかけて私たちに愛を教え、愛の姿を示してくださいました。私たちもその愛にならい、その愛を学びつつ、共に助け合い、支え合って生活するものでありたいと願います。